

114 學年度第一學期 Eurasia 基金會(from Asia)國際講座
第八期「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(4)
講題：東亞視域下的氣論

王俊彥
(2025.10.09)

摘要

本講座主題為「東亞視域下的氣論」，主講人王俊彥教授長期研究宋明清理學、兩漢思想、易經的氣論，主要從宋明理學的理到氣架構出發，延伸至日本、韓國、越南等地的相關論述，梳理「氣」作為東亞思想共同語彙的形成、分歧與匯流，展現跨域思想的相互影響。在唐代佛、道注重本體的背景下，宋明新儒學則將道德提升為本體，亦即「天理」，並由氣化規律與天理互動，構成理解自然、心性與倫理的核心座標。

一、宋明理學中的「理—氣」論之展開

宋明理學的經典節點：張載(1020-1077)主張「太虛即氣」，以體用不二貫通有無與性命；朱子則提出「理同氣異」、理氣「不離不雜」，奠定形上之理與形下之氣的分殊與互依；王陽明(1472-1529)以「良知」統攝心體，指其「流行為氣」、精氣神相貫；王廷相(1474-1544)提出「理能生氣」之說，強調「氣為本體」、理在氣中；至戴震(1724-1777)更以「氣化整體」重釐「道由氣說」，將陰陽與五行置於生生流行的實體論上。此一線索，呈現理學內部對「本體—生成—規則」三者的不同定位與張力。

二、東亞各國「氣論」的發展與相互作用

在東亞各國的氣論比較上，王俊彥教授擷取多位思想家，印證氣論的在地化與其間的互動。日本方面，分析德川幕府御用儒學家林羅山(1583-1657)以「天地之氣生之」說明萬物非常之態，凸顯「氣」對差異生成的解釋力；並以古義學的大家伊藤仁齋(1627-1705)、陽明學者山田方谷(1805-1877)為代表，皆強調「氣生理」、理由氣中條理化；提及九州出身的朱子學者貝原益軒(1630-1714)主張「理即氣之理」，以陰陽之「道」反對將太極抽離氣機的空疏化等相關問題。

韓國方面，說明朝鮮儒學思想家李栗谷(1536-1584)以「理氣雖離不得而不相挾雜」，界定一與二的辯證張力，強調動靜無端、陰陽無始；朝鮮實學思想家

丁茶山(1762-1836)以「無形為本」的格局，回到《易》象與氣機，指出太極、兩儀、四象本為度象名義，反對將之實體化，並對性與形氣之關係提出修正，避免把「人性」「獸性」混作一物。

越南後黎朝著名的政治家、思想家黎貴惇(1726-1784)則以「理在氣中」為斷，指出「盈天地之間皆氣也」，理因氣而見；其論以「乾元資始、坤元資生」統攝形氣關係，將陰陽奇偶、知行體用納入一個可對說而不可簡化的系統。此處可見越南儒學既承漢籍義理，又能以在地脈絡延展氣論的詮釋空間。

三、作為異文化交會點的「氣」概念

此外，敘述清代伊斯蘭教的思想大師劉介廉(1669-1764)《天方性理》的「元氣論」以「天道開合、恆勞不息」描述生化循環，體現儒學吸納外來知識框架的嘗試；西夏《聖立義海》所見「氣化宇宙論」所提示多元文明語境中的「氣」概念，分析「氣」並非一元傳統的內部術語，而是跨語境可互譯的宇宙生成觀。

四、結論

綜合而言，本講座以「理—氣」的時間與「中—日—韓—越」的空間相互比較，釐清宋明以後對「氣」之本體、功能與規律的多重定位；同時揭示「氣論」在東亞世界如何因地制宜地與倫理、修養、知識論與自然觀結合。王俊彥教授指出，重新梳理「氣」不僅有助於詮釋以「理」為唯一形上中心，更能為當代倫理、哲學與跨文化思想研究提供方法與啟發。

徐興慶 整理
2025.10.09

114 學年度第一學期 Eurasia 基金會(from Asia)國際講座
第八期「亞洲共同體：東亞學的構築與變容」系列講次(4)
講題：東アジアの氣論における範圍と特色

王俊彥
(2025. 10. 09)

要旨

本講座の主題は「東アジア視域下の氣論」であり、講師の王俊彥教授は、長年にわたり宋・明・清の理学、前漢・後漢の思想、および『易經』における「氣」概念を研究してきた。本講座では、宋明理学における「理から氣へ」という構造を起点とし、それが日本・韓国・ベトナムなど東アジア各地の思想にどのように展開・受容されたかをたどり、「氣」が東アジア思想における共通語彙として形成され、分岐し、再び交わる過程を明らかにする。すなわち、思想の越境的交流がいかにして相互に影響を及ぼしてきたかを示すものである。唐代において仏教や道教が形而上の本体を重視したのに対し、宋明の新儒学は道徳を本体＝「天理」として位置づけ、「氣化の法則」と「天理」との相互作用によって自然・心性・倫理を理解するための基軸を形成した。

一、宋明理学における「理-氣」論の展開

宋明理学の主要な節点として、まず張載（1020-1077）は「太虚即氣」を唱え、有と無、性と命を体用不二の立場から貫通させた。朱子は「理同氣異」「理氣不離不雜」を提唱し、形上の理と形下の氣の区別と相依関係を確立した。王陽明（1472-1529）は「良知」によって心体を統合し、「その流行は氣なり」として精・氣・神の貫通を説いた。王廷相（1474-1544）は「理能生氣」を主張し、「氣を本体」としつつ理は氣の中にあると述べた。さらに戴震（1724-1777）は「氣化全体」の観点から「道は氣によって説かれる」と再定義し、陰陽と五行を生生流転する実体論の上に位置づけた。これらの理論系譜は、「本体—生成—規則」をめぐる理学内部の多様な定位と緊張関係を示している。

二、東アジア各地域における氣論の展開と相互作用

王教授は東アジア諸国における思想家たちを比較し、気論の在地化とその相互作用を分析する。

日本では、徳川幕府の儒学者・林羅山（1583-1657）が「天地の気、生をなす」として万物の変化を説明し、「気」が差異的生成を説明する力をもつことを明らかにした。また、古義学の伊藤仁斎（1627-1705）や陽明学者・山田方谷（1805-1877）はともに「気生理」すなわち「理は気の中に条理化される」と主張した。朱子学者・貝原益軒（1630-1714）は「理はすなわち気の理なり」と述べ、陰陽の「道」を基盤に太極を気機から切り離す抽象化を批判した。

韓国では、朝鮮儒学の李栗谷（1536-1584）が「理気は離るることあれども相挾雑せず」として、一と二との弁証的緊張を規定し、動静無端・陰陽無始を強調した。また、実学者・丁茶山（1762-1836）は「無形を本とす」との立場から『易』の象と気機を重視し、太極・両儀・四象を実体化することを批判、性と形気の関係を修正し「人性」と「獣性」の混同を避けた。

ベトナム:後黎朝の政治家・思想家である黎貴惇（1726-1784）は「理在氣中」を唱え、「天地の間に満つるは皆気なり」と述べた。理は気によって顕れるものであり、「乾元資始・坤元資生」によって形気関係を統べ、陰陽・奇偶・知行・体用を可逆的で簡約不能な体系に収めた。ここには、漢籍の義理を継承しつつ、在地文脈に即して気論の解釈空間を拡張したベトナム儒学の独自性が見られる。

三、他文化との接点としての「気」概念

さらに、清代イスラーム思想家・劉介廉（1669-1764）の『天方性理』に見られる「元氣論」は、「天道は開合し、恒に勞して息まず」と述べ、生化の循環を説くものであり、儒学が外来知識体系を取り込もうとする試みを示す。また、西夏の『聖立義海』に見られる「氣化宇宙論」も、多文明的文脈における「気」の多義性を示し、「気」が単なる一元的伝統概念ではなく、異文化間で翻訳可能な宇宙生成論的観念であることを明らかにする。

四、総括

総じて本講座は、「理-気」という時間的軸と、「中-日-韓-越」という空間的軸を交差させ、宋明以降の「気」概念の本体・機能・規律の多重的な定位を

明らかにする。同時に、「気論」が東アジアにおいて倫理・修養・認識論・自然観といかに結びつき、地域ごとに適応・変容していったかを提示するものである。王俊彦教授は、「気」の再整理は、「理」を唯一の形上中心とする理解を再考させるとともに、現代の倫理・哲学・比較思想研究に新たな方法的示唆と啓発をもたらすと結んでいる。

キーワード：東アジア、気論、宋明理学、比較思想

中国語要旨・まとめ 徐興慶

日本語翻訳 徐興慶

2025.10.09